

お母さんを百万遍

長年、多くの児童詩を世に紹介してこられた全盲の詩人、佐藤浩さん（青い会主宰）が編集解説された、児童詩誌『遠くへ行かないでお母さん』（ぱるす出版）のあとがきに、次のようなお話が紹介されていました。

私がある小学校へ講演に行った時のことです。終了後、座談会の席でY先生から次のような質問がありました。

私の受け持ちの小学四年生の子がこんな詩を書いたのです。

（＊一部漢字に変換しています）

お母さんが 車に はねられた
お母さんが 病院の 霊安室にねかされていた
お母さんを 火葬場へつれていった
お母さんが 骨に なってしまった
お母さんを 小さなはこに入れた
お母さんを ほとけさまに おいた お母さんを 毎日 おがんでいる

私はその子に「お母さんは一回書けばそれでわかります。だから二行目以下のお母さんは書かなくてもいいよ」と。

しかし、その子はどうしても分かってくれないのです。こんな時はどう指導したらいいのですか。

私は即座に答えました。

「その子の気が済むまで何回でも書かせてあげてください。詩の形を整える前に、その子の悲しみも分かち持ってみてください。そうすれば、なぜお母さんが一回ではダメなのかが分かると思います。もしその子がお母さんを百万遍書きたかったら、百万遍書かせてあげてください」

Y先生は声を詰まらせながら了承してくださいました。

小さい子供さんは、嬉しい時も、悲しい時も、ほめられた時も、寂しい時も、「お母さん、お母さん」と、その名を呼び続けます。呼んでいるのは子供ですが、呼ばせているのは母親の愛情です。

この詩を書いた子供さんもお母さんの深い愛情に包まれ育てられたはずです。そのお母さんのいなくなった、あまりの寂しさに、あまりの悲しさに、この子は「お母さん、お母さん」と何度も何度も書き綴らずにはおれなかったのです。

書き綴るその子の心の中に、お母さんは生きています。

書いているのは子供ですが書かせているのはお母さんの愛です。
それはまさに、お念仏（仏のみ名を呼ぶ）に相通じるものがあります。

真宗大谷派の学僧・金子大栄先生はこう語っておられます。

「念仏することは、私が念仏するのでなくして、仏の心が我らに表われて念仏となるのである。だからこれが私の念仏であるというものはない。念仏申す者は確かに私に違いないが、念仏申させたのは阿弥陀である」

私が称える一声の念仏の背後に、我が「いのち」を包んで捨てない阿弥陀さまの大いなるハタラキがあるのです。

そのことを思う時、あらためて衿を正して、お念仏申さずにはおれません。

平成24年12月 「光明寺だより80号」より